

第1022回サントリー定期シリーズ

9月11日(木) 19:00開演 サントリーホール

第173回東京オペラシティ定期シリーズ

9月12日(金) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

第1023回オーチャード定期演奏会

9月14日(日) 15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

指揮：アンドレア・バッティストーニ

コンサートマスター：近藤 薫

9
/ 119
/ 129
/ 14

ピツエッティ：

夏の協奏曲 (約30分)

- I. 「朝」：ヴィヴァーチェ・エ・アリオゾ
- II. 「夜想曲」：ラルゴ
- III. 「ガリアルダとフィナーレ」：アレグロ・ヴィゴロゾ

－ 休憩 (約15分) －

R. シュトラウス：

アルプス交響曲 Op. 64 (約50分)

夜 — 夜明け — 登山 — 森の中への立ち入り — 小川に沿っての歩み — 滝 —
 幻影 — 花咲く草原 — 山の牧場 — 林で道に迷って — 氷河 — 危険な瞬間 —
 頂上にて — 見えるもの — 霧が立ちのぼる — 次第に日がかげる — 哀歌 —
 嵐の前の静けさ — 雷雨と嵐、下山 — 日没 — 終末 — 夜

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)|

独立行政法人日本芸術文化振興会

公益財団法人アフィニス文化財団

「楽団としての成長、発展を目指して企画された意欲的な公演」を対象としています。



協力：Bunkamura (9/14)

- ♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。
- ♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフのご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。
- ♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。
- ♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。
- ♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。終演後のカーテンコールも、マナーを守ってお楽しみください。

出演者プロフィール



©上野隆文

指揮

アンドレア・バッティストーニ

Andrea Battistoni, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 首席指揮者

1987年ヴェローナ生まれ。国際的に頭角を現す、同世代を代表する指揮者の一人。2013年～2019年ジェノヴァ・カルロ・フェリーチェ歌劇場の最初の首席客演指揮者、2016年10月より東京フィル首席指揮者。2025年1月よりトリノ王立歌劇場音楽監督、同年ワロン王立歌劇場コンポーザー・イン・レジデンス、2026年1月よりオペラ・オーストラリア音楽監督。

東京フィルとは『ナブッコ』『リゴレット』『蝶々夫人』（二期会）、グランドオペラ共同制作『アイダ』、ローマ三部作、『展覧会の絵』『春の祭典』『カルミナ・ブラーナ』等数多く共演。コンサート形式オペラ『トゥーランドット』（2015）、『イリス（あやめ）』（2016）、『メフィストフェレ』（2018）で批評家、聴衆の双方から音楽界を牽引するスターとしての評価を確立。同コンビで日本コロムビア株式会社よりCDを継続的にリリースしている。

スカラ座、フェニーチェ劇場、ベルリンドイツ・オペラ、ドレスデン州立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、アレーナ・ディ・ヴェローナ、マリンスキー劇場、ローマ・サンタ・チェチーリア管、イスラエル・フィル等世界の主要歌劇場・オーケストラと共演を重ねている。2017年に著書『マエストロ・バッティストーニのほくたちのクラシック音楽』（音楽之友社）を刊行。2021年、東京フィルとの録音『ドヴォルザーク新世界&伊福部作品』欧米盤が「OPUS KLASSIK 2021」交響曲部門（20-21世紀）を受賞。

Website <http://www.andreabattistoni.it/>Facebook <https://www.facebook.com/Andrea-Battistoni-159320417463885/>

9/11

9/12

9/14

楽曲紹介

今月の定期演奏会について

1880年生まれのイルデブランド・ピツェッティ(伊)は、1864年生まれのリヒャルト・シュトラウス(独)と少しだけ世代は離れているが、ともにロマン派的音楽語法を保ち続け、オーケストラ曲とオペラを好んで作曲、戦中の日本政府が両者に皇紀2600年祝典曲を委嘱した、という共通点がある。前者は87歳、後者は85歳と長命を保ったのも似ていよう。ピツェッティはフィレンツェとミラノの音楽院で教職に携わったこともあってか、作曲家としての名前があまりのこらず、その作品がほとんど演奏会のレパートリーとならないのは残念な限り。今回、シュトラウスとともに聴くことで、ヨーロッパにおける20世紀音楽の諸相をより身近に感じることができるはずである。(広瀬大介)

ピツェッティ 夏の協奏曲

解説=小畑恒夫

イルデブランド・ピツェッティ(1880-1968)は、同世代のカゼッラ、マリピエーロ、レスピーギと並んで20世紀イタリア音楽を開拓した作曲家の一人。発想の泉を古楽に求めたのは4人に共通するが、情熱の多くをオペラに注ぎ続けたピツェッティは特異な存在だった。『フェードラ』(ダンヌンツィオ台本、1915年初演)、『大聖堂での殺人』(1958年初演)は彼の数々の佳作の一部にすぎない。「劇性」なるものが彼の音楽の原点だったが、それはヴェリズモ的なリアリズムではなく、もっと内面的なもの、心をゆさぶる「内なる劇性」だった。その創作における抑制的な美学は、客観的、分析的な性格・思考に由来するのだろう。ピツェッティはフィレンツェ、ミラノ、ローマの音楽院院長を歴任し、また学者・批評家としても重要な活動を行った。

彼の最初の交響作品である『夏の協奏曲』は1928年に書かれた。当時ミラノに住んでいたピツェッティは、その夏を二人目の妻マリアとともにベネト州の避暑地コルティナ・ダンベッツォで過ごしたが、その幸せな環境の中でこの曲が生まれたのである。「協奏曲」とは言え、特定の独奏楽器を持たない管弦楽のための

作品で、規模は違うがヴィヴァルディの合奏協奏曲を連想させる。また作曲家が若き日に学んだベートーヴェンの『田園交響曲』へのオマージュでもあるだろう。

三つの楽章には「朝」「夜想曲」「ガリヤルダ」と表題がつき、明らかに自然からアイデアを得ているが、決して描写音楽ではない。友人のG. ガッティが述べるように、彼の「田園に対する情熱的な愛」が、内的な劇性の表現にぴったりの「場」を見つけたと言うべきだろう。

第1楽章「朝」(ヴィヴァーチェ・エ・アリオゾ)は、朝の清新な大地への共感から始まる。ピアノとハープを含む力強いテーマの合間に鶏の鳴き声も聞こえる。その陽気なテーマはやがて少し物憂げなものに雰囲気を変え、心の内面をラプソディ的に描く空想の世界が出現する。最初の主題が再現されると音楽は次第に高揚し、力強い自然賛歌になって終わる。

第2楽章「夜想曲」(ラルゴ)は、ヴァイオリンによる主題と、木管とホルンによる別の主題が組み合わせられて展開する。呼びかけとささやきがポリフォニックに呼応する。哀愁を帯びた繊細なフルート・ソロが美しい。自由に広がった瞑想は、やがてフルートの甘美な響きとともに消えていく。

第3楽章「ガリアルダとフィナーレ」(アレグロ・ヴィゴロゾ)には祝祭的な雰囲気がある。ルネッサンス期に流行した「ガリアルダ」は三拍子の弾むような舞曲。最初に提示される躍動する主題は、やがて現われるホルンとファゴットの主題や、クラリネットと弦楽器の感傷的な主題の合間に、ロンドのように繰り返し現われる。フィナーレに入ると、さまざまな断片をまじえて対位的に高揚するが、最後は瞑想するように終わる。

【作曲年代】1928年 【初演】1929年2月28日ニューヨークにて、アルトゥーロ・トスカニーニの指揮による

【楽器編成】フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、バスターューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、グロッケンシュピール)、ハープ2、チェレスタ、ピアノ、弦楽5部

おばた・つねお／昭和音楽大学客員教授、NPO日本ヴェルディ協会理事長。「音楽の友」「レコード芸術」などで音楽評論活動を展開。著書に『ヴェルディ(作曲家・人と作品)』『ヴェルディのプリマ・ドンナたち ヒロインから知るオペラ全26作品』『つながりと流れがよくわかる 西洋音楽の歴史』(共著)、訳書にニコラーオ『ロッシニ 仮面の男』など。

リヒャルト・シュトラウス アルプス交響曲 Op. 64

解説=広瀬大介

9/11

9/12

9/14

リヒャルト・シュトラウス(1864-1949)にとって、『アルプス交響曲』は、『家庭交響曲』(1904年初演)以来、10年ぶりに手がけた管弦楽作品である。『家庭交響曲』の後、いったん交響詩の作曲は休止し、シュトラウスはオペラの作曲に邁進する。1910年代はベルリンでのカベルマイスター職を継続していることもあり、シュトラウスのオーケストラ作品の新作が待望される空気感が、おもにベルリンを中心にあったとは考えられよう。1915年10月28日の自身の指揮による『アルプス交響曲』初演は、場所こそベルリン・フィルハーモニーだったが、オーケストラはシュターツカペレ・ドレスデンのベルリン客演というかたちで実現している。

晩年のシュトラウスは自身の伝記を編んだヴィリ・シューにこう語っている。「私は自作の『アルプス交響曲』を『アンチ・キリスト』と名付けたいと思っていた。すなわち、永遠かつ壮大な自然への礼賛であるこの作曲を通じて、慣習の束縛を浄化し、解放するために」と。1902年、この『アンチ・キリスト』、そして『芸術家の悲劇』という名前で4楽章から成る交響曲のスケッチが作られる。シュトラウスがニーチェの中に読み取った問題意識を音楽として表現する、いわば『ツァラトゥストラ』の続編であったが、1911年からはこの構想を引き継ぐかたちで、アルプスを描写する自然賛歌へと内容は微妙にシフトする。

自然賛歌となったことで、「芸術家」は「登山者」と形を変えた。登山者が、アルプスの壮大な自然に触れ、登山に挑み、頂上を極めつつも嵐に襲われて下山するという一日を描いてはいるが、その背後には、自然の強大な力に抗うことのできない人間、その人間と自然は最後まで和解できない、という『ツァラトゥストラ』のメッセージを再度構築しようと試みたともいえる。

冒頭の「夜」では、夜のしじまを表現するために、変口短調の音階が順次下降しながら、その構成音がすべて弦楽器で鳴らされる(いわゆるトーンクラスターの使用例)。それに続く爆発的な「夜明け」の描写(イ長調)は、敢えて『ツァラトゥストラ』冒頭とイメージを重ねているように見える。

力強い行進曲のような、チェロ、コントラバスとハープで演奏される「登山」。「登山者」のモチーフ(変ホ長調)と「夜明け」の調、すなわち人間と自然の

調は遠く設定されている。変ホ長調が『英雄の生涯』（1899年初演）における「英雄」を表す調であることを考えれば、この「登山者」もまた、シュトラウス自身の自画的表現かもしれない。この登山者の歩みを示すモチーフは、「森の中」に入っても、「滝」を眺めても、「道に迷って」も、形を変えて現れ続け、自然の雄大さ・恐ろしさと、それに翻弄される登山者の姿が、シュトラウスが駆使する対位法的な音楽によって、同時進行的に描かれる。

「幻影」と題された箇所は、そのように翻弄される登山者の心象風景とも読み解ける、全曲中でもっとも謎を秘めた場面。この場面で夜の闇のテーマが（この時は昼にもかかわらず）現れ、不気味さを醸し出す。嵐に遭って下山する際は登山音型が逆行形で現れ、自然の偉大な力を前にした登山者は、自らの無力を悟らされ、うなだれる姿（登山音型の変形）で曲が閉じられる。

これまで曲全体は「夜明け」「登山」「頂上」「下山」の4つの部分（楽章）から成る「交響曲」と解釈されるのが一般的だった。だが、登山者が頂上にたどり着いた部分を中心とした（かなり非対称ではあるが）鏡像型で構成された作品と考えるほうが実態に近いのではないか。最後には、冒頭と同じ主題・同じ変口短調が回帰して終わる。従来の交響曲の形式とは一線を画しているはずのこの曲に「交響曲」という名前を与えることによって、シュトラウスは聴き手をはぐらかし、ニーチェが批判したような「慣習の束縛を浄化し、解放」されることのない人間として揶揄したようにも思われる。後の『紀元2600年祝典曲』（1940年初演）では、同じ音楽構成と調性がわずか15分程度の曲の中にコンパクトに詰め込まれたことをみても、この形式にシュトラウスが込めた想いの深さを痛感させられる。

【作曲年代】1911～15年 【初演】1915年10月28日ベルリンにて、作曲者自身の指揮による

【楽器編成】フルート4（3、4番はピッコロ持ち替え）、オーボエ3（3番はイングリッシュホルン持ち替え）、ヘッケルフォーン、E♭クラリネット、クラリネット2、バス・クラリネット（Cクラリネット持ち替え）、ファゴット4（4番はコントラファゴット持ち替え）、ホルン8（5～8番はワーグナー・チューバ持ち替え）、トランペット4、トロンボーン4、チューバ2、ティンパニ2、打楽器（小太鼓、大太鼓、トライアングル、スイスカウベル、シンバル、タムタム、ウィンドマシーン、サンダーシート、グロックンシュピール）、ハーブ2、チェレスタ、オルガン、弦楽5部

【バンド】ホルン12、トランペット2、トロンボーン2

ひろせ・だいすけ(音楽学、音楽評論)／1973年生まれ。青山学院大学教授。日本リハルト・シュトラウス協会常務理事・事務局長。著書に『オペラ対訳×分析ハンドブック シュトラウス／楽劇 サロメ』『同／楽劇 エレクトラ』『同／楽劇 ばらの騎士』(アルテスパブリッシング)など。『レコード芸術』など各種音楽媒体での評論活動のほか、NHKラジオへの出演、演奏会曲目解説・CDライナーノーツの執筆、オペラ公演・映像の字幕・対訳などを多数手がける。

【特別寄稿】

アンドレア・バッティストーニが綴る 母なる自然へのふたつの音楽的アプローチ ——哲学的対話と生命への讃歌

「自然によって人間の感性の中に目覚めさせられた様々な感覚を、楽器の音を通して表現することは、おそらく音楽そのものと同じくらい古くからの行いだろう」

「(アルプス交響曲について)…それは自然について語る音楽ではあるが、本物の、真正な、鋭敏な自然であり、音楽の中にバースと苦しみとともに表現されるのは、当然のことながら、大オーケストラの音色を楽しむ喜びだけではないのである」

——アンドレア・バッティストーニ
(訳=井内美香)



◀全文はこちらから